



# オープンラボラトリー

## OPEN LABORATORY

京都芸術大学舞台芸術研究センター  
舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点  
アニュアルレポート

VOL.11

2023年度

# OPEN LABORATORY

京都芸術大学 共同利用・共同研究拠点  
舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点  
アニュアルレポート

## 太田省吾 その実践と思索をめぐって

共同利用・共同研究拠点 ..... 金 潤 貞 ・ 新 里 直 之 ..... P. 1  
連携プロジェクト

### ◆ 舞台芸術を用いた〈他者〉との対話の場の構築と継続 —旧真田山陸軍墓地を巡る二つの創作を通して—

テーマ研究Ⅰ ..... 岡 田 菫 子 ..... P. 2

### ◆ 次世代舞台音響『イマーシブオーディオ』の可能性について

テーマ研究Ⅱ ..... 大 久 保 歩 ..... P. 4

### ◆ 蘇るバレエ・リュス：

#### 薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究

劇場実験型公募 ..... 関 典 子 ..... P. 6

### ◆ 「hysteria」プロジェクト

#### —〈女性〉の身体への眼差しを転じるリサーチ・ダンスの試み—

リサーチ支援型公募Ⅰ ..... 松 本 奈 々 子 ..... P. 8

### ◆ アピリア演出『オルフェオとエウリディーチェ』(1913)を モデリングする

リサーチ支援型公募Ⅱ ..... 横 田 宇 雄 ..... P. 10

### ◆ 環境配慮型の舞台芸術創作のための国内の舞台芸術と 環境についての基礎調査及び英国他ヨーロッパの サスティナブルプロダクションの実例調査

リサーチ支援型公募Ⅲ ..... 大 島 広 子 ..... P. 12

◆  
インフォメーション、編集後記 ..... P. 14

## 太田省吾 その実践と思索をめぐって

金 潤 貞 | 早稲田大学演劇博物館助教  
新里 直之 | 京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員

早稲田大学演劇博物館 特別展「太田省吾 生成する言葉と沈黙」(2023年10月2日～2024年1月21日)の開催にあたり、同大学演劇映像学連携研究拠点と本研究拠点との連携による研究事業を行った。公開のシンポジウムとトーク付き上映会、非公開の研究会和インタビュー調査を実施し、日本現代演劇の代表的な演出家・劇作家の一人であり、「沈黙劇」と呼ばれる独自の表現スタイルを切り拓いた太田省吾(1939-2007)の仕事、その思索と実践を多角的に検証した。

### 研究会 太田省吾の仕事、その現在性と歴史性(非公開)

日時：2023年11月15日、オンライン実施  
参加者：岩城京子、金潤貞、新里直之

現代演劇を専門とする研究者が集まり、最新の研究動向や国際的事例を踏まえて、作家の仕事を検討した。研究代表者である金と新里の基調発言を受けて、ベルギーのアントワープからオンライン参加した岩城氏が、演劇学とパフォーマンス学の交差点から太田のドラマトゥルギーを再考し、日本演劇史の「稗史」を紡ぐという視点から太田作品の意義を示した。それらを踏まえて、三者により太田の仕事の現在性と歴史性を議論した。

### シンポジウム 言葉と沈黙のありか —太田省吾の仕事をめぐって(公開)

日時：2023年12月7日  
会場：早稲田大学小野記念講堂  
参加者：安藤朋子、鴻英良、新里直之、花光潤子、森山直人

太田省吾と同時代を伴走した俳優、プロデューサー、演劇批評家らが参集し、作家の遺した足跡について共同討議を行った。1970・1980年代の劇団転形劇場、1990・2000年代の公立劇場(藤沢市湘南台文化センター市民シアター)と大学(京都造形芸術大学/現・京都芸術大学)での試みを振り返り、今日の芸術創造とそれを取り巻く環境に対する示唆を見つめ直した。

### 太田省吾演出『小町風伝』『水の駅』上映&トーク(公開)

日時：2023年12月20・21日  
会場：京都芸術大学映像ホール  
参加者：佐伯順子(20日)、相模友士郎(21日)、金潤貞、新里直之

太田省吾演出による「沈黙劇」と呼ばれるユニークな演劇作品の記録映像を上映し、あわせて縁のある研究者とアーティストを招いたトークイベントを開催した。20日には『小町風伝』(1977年初演作品、記録映像は1984年版)を上映し、老い、セクシュアリティ、能楽などのテーマをめぐって討議した。21日には『水の駅』(1981年初演作品、記録映像は1986年版)を上映し、沈黙劇の諸特徴とその受容体験について議論した。



『水の駅』上映&トーク

### インタビュー調査 日韓共同プロジェクト『更地(韓国版)』 韓国芸術総合学校演劇院公演『水の駅』を振り返って(非公開)

日時：2024年1月22日、オンライン実施  
参加者：金水枝、金潤貞、新里直之

作家の国際的なプロジェクトや演劇教育等をテーマとするオンライン・インタビューを行った。インタビュイーである金水氏は、太田省吾演出『更地(韓国版)』(2000年)に出演し、近年は韓国芸術総合学校演劇院において学生たちと『水の駅』を上演している。そうした具体的な事例を通して、金水枝氏が太田の演劇観をどのように捉えているのかについて、貴重な証言を得ることができた。

以上の研究活動を記録し、成果物(紙媒体の冊子、ウェブサイト)にまとめ、広く一般に向けて無料公開した。

### 成果物『太田省吾 その実践と思索をめぐって —2023年度共同利用・共同研究拠点連携プロジェクト記録集』

発行日：2024年3月31日  
編集：金潤貞、新里直之、鳩飼末緒、長谷川理絵  
発行：早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点、京都芸術大学舞台芸術研究センター舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点

<https://prj-kyodo-enpaku.waseda.jp/research/file/report-2023-collaborativeprojects.pdf>  
<https://k-pac.org/hp/wp-content/uploads/report-2023-collaborativeprojects.pdf>

### 研究組織

#### 研究代表者

金 潤 貞 | 早稲田大学演劇博物館助教・演劇研究  
新里 直之 | 京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員・演劇研究

#### 研究協力者

安藤 朋子 | アクター・Theater Company ARICA  
岩城 京子 | アントワープ大学文学部芸術学科准教授・演劇研究・パフォーマンス研究  
鴻 英良 | 演劇研究者  
金 水枝 | 韓国芸術総合学校演劇院演技科教授・芸術教育学  
佐伯 順子 | 同志社大学大学院社会学研究科教授・比較文化史・メディア学  
相模 友士郎 | 演出家  
長谷川 理絵 | 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点  
鳩飼 末緒 | 早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点 研究助手  
花光 潤子 | プロデューサー・NPO 法人魁文舎理事長  
森山 直人 | 演劇批評・多摩美術大学美術学部・演劇舞踊デザイン学科教授

# 舞台芸術を用いた〈他者〉との対話の場の構築と継続 －旧真田山陸軍墓地を巡る二つの創作を通して

岡田 露子 | 演劇研究、京都芸術大学舞台芸術学科専任講師

本研究では、研究会とアーティストの創作を軸に、舞台芸術が戦争に関する「複層的な記録／記憶の集積の場」を、いかに他者との対話の場へと拓き得るのかという問いを探究した。取り上げた場、「旧真田山陸軍墓地」は国家と個人を巡る記録と記憶が複層的に集積する特殊な時空間である。そこは歴史的・文化的文脈の複雑さゆえに、異なる意見を持つ者同士の対話が拓かれにくいようにも感じられる場でもある。研究代表者は、その場を舞台芸術で拓く試みを2019年より継続しており、今年度の研究はその一環である<sup>1</sup>。

2年計画で、研究メンバーを中心に研究会とフィールドワークを行い、上演と対話の場を拓く。2023年度は、筒井潤が劇場作品を創り、岡田と山崎達哉、高安美帆が対話の場を担当した。2024年度は、筒井の創作への応答の意味も込めて、高安美帆が創作を行う予定である。

<sup>1</sup>発端は『旧真田山陸軍墓地、墓標との対話』（阿叻社、2019）収録の拙論を参照

## 各研究活動の報告

4月から月に1度程度の研究会を重ねて、互いの関心や問題意識の共有を行い、10月～11月頃には上演構造や出演者を決め、2024年1月から稽古を本格的に始め、3月に劇場実験を行った。

### 第1回研究会／第2回研究会（共に非公開）

日時：2023年4月8日（土）14:00～18:00 / 6月11日（日）14:00～19:00  
会場：旧真田山陸軍墓地、集会場 / 大阪大学中之島芸術センターセミナー室4A

第1回研究会では、歴史研究者の小田康徳氏より旧真田山陸軍墓地の歴史の講義を受けた後、小田氏・岡田祥子氏のガイドのもと旧真田山陸軍墓地を歩いた。第2回研究会では事前に筒井から提示されていた小田原のどか『近代を彫刻／超克する』（講談社、2021年）を読んだ感想を共有した他、各自が関心のある資料を持ち寄り意見を交わした。旧真田山陸軍墓地がどのような「記憶の場」を形成するのか、資料に記載のない1975～90年の旧真田山陸軍墓地はどのような状況だったのか、全員の意見を尊重する対話の場はどうすれば創れるか、研究題目の「他者」とは誰か、などの問いが出た。



第1回研究会。旧真田山陸軍墓地にて

### 第3回研究会／第4回研究会 ／第5回研究会／第6回研究会（全て非公開）

会場：旧真田山陸軍墓地と周辺の地域  
日時：2023年7月1日（土）13:00～18:00 / 8月11日（金）14:00～18:00  
8月30日（水）14:00～18:00 / 10月28日（土）10:30～15:00

研究会で出た問いを踏まえ、旧真田山陸軍墓地の近隣の方々への聞き取りとフィールドワークを行った。第3回研究会では、近隣住人であり旧真田山陸軍墓地のボランティアガイドも務める吉岡武氏に聞き取りを行った。第4回研究会・第5回研究会では、地域に古くからある店舗を中心に聞き取った。旧真田山陸軍墓地の空き地で野球や運動会の練習をやっていた話や、集会場でヨガ教室や料理教室をした話などがあり、「旧陸軍の施設」というよりは「空地」や「あそび場」という感覚を持つ人がいることがわかった。第6回研究会では（公財）真田山陸軍墓地維持会主催の秋季慰霊祭へ参加した。慰霊祭の特色や、式典を構築する諸要素の組み合わせ方や順番を持つ意味合いについての話がでた。

研究会と並行し、上演や対話の場の構成に関する具体的な相談も行い、時間配分などの大枠や関連講座の開催の計画が話し合われた。

### オーディション／第7回研究会／稽古／公開リハーサル （研究会と稽古は非公開、他は公開）

日時：2023年10月26日（木）、27日（金）、29日（日） / 12月27日（水）10:00～15:00  
2024年1月～3月頭 / 2024年3月2日（土）13:00～14:30  
会場：京都芸術大学天心館アネックス3階稽古場A / 旧真田山陸軍墓地集会場・旧真田山陸軍墓地 / 京都芸術センター制作室10・11 / ウイングフィールド

10月末にオーディションで出演者を募った。16名が集まり、最終的に出演者4名・アンダースタディ3名が参加することになった。第7回研究会では、新たなメンバーが旧真田山陸軍墓地と出会う機会を設けた。筒井はこれら準備と並行して戯曲

を書き、10分以内の短いピース「脚気」「見物」「規則」「女学生」「少年」「集い」の6編を完成させた。

稽古は京都芸術センター制作室11で2024年1月から行い、3月2日にはSTUDIO OPENDAY vol.4にて、一般参加者数名の前で公開リハーサルを行った。

### 劇場実験『墓地の上演』（公開）

日時：2024年3月9日（土）、10日（日）  
関連講座：両日10:30～12:00 / 上演：両日13:30～16:30  
会場：関連講座：京都芸術劇場楽屋 / 上演：京都芸術劇場 studio21  
参加費：無料（講座・上演共に）  
参加者：関連講座：両日15名程度 / 上演：各回定員約30名・関係者各回定員約10名

上演は以下のような構成を取った。

【1度目の上演】旧真田山陸軍墓地にまつわる記録や記憶をもとに創作された上演時間10分程度の短いピース6編のうち5編が観客のくじ引きで選ばれ、上演順が決まり、上演される。

【1度目の対話】上演の印象を記録する「自己との対話」の時間が10分程度設けられる。

【2度目の上演】再度観客がくじを引き（その際1度目の上演で選ばれなかった1編を含める。）、5編が選ばれて上演される。ただし、2度目は1度目の上演とは部分的に異なっており、言わない／異なる台詞や配役に違いなどがある。

【2度目の対話】ファシリテーターと共に、約10名の円座で話す。話の内容はホワイトボードにメモされる。対話が終わると他のグループのホワイトボードを見る時間となり、観客全員が互いの感想の一端を共有する。

この上演形式は、筒井がリサーチを通して、どのような記録や逸話に、誰を通して、どのような順序で触れるかによって人が旧真田山陸軍墓地に持つ印象が異なると感じたことなどから、立ち上げられていった。

50分の対話の場に関しては、全員が意見を述べる機会を得るが述べない自由も担保することや、旧真田山陸軍墓地に関する知識を使うのではなく、上演で得たものを話すこと、ファシリテーターは意見を何かの方向へ集約しようとしめないこと、というようないくつかの決め事を定め、他者の意見と出会う場として構築した。

また、上演と対話の場を可能な範囲で開いていくために、9日の上演においてテキストの事前提供やサポーターの配置、対話の場において手話通訳の鑑賞サポートを行った。

さらに、小田康徳氏（NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会 理事長、大阪電気通信大学名誉教授）による旧真田山陸軍墓地についての講座をひらき、関心がある人が歴史的な知識に出会う場も設けた。

劇場実験の結果検証のために必要な第三者の意見として「劇場実験の記録／結果／検証」を事前に渡辺健一郎氏に依頼した。また、一般観客で来場された高嶋慈氏にも「artscape」に取り上げていただいた。これらの第三者の視点を踏まえて、上演後にはふりかえりの場を持った。

### 「墓地の脱／物語化」（文：渡辺健一郎）

（「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会 ウェブサイト」  
https://www.assmcc.org/?page\_id=1495）

### 「劇場実験『墓地の上演』（文：高嶋慈）

（「artscapeウェブサイト」https://artscape.jp/article/10532/）

作・演出：筒井潤

出演：片山寛都（京都大学人間・環境学研究科芸術文化講座）、熊澤洋介（京都大学人間・環境学研究科修士課程 / 社会学）、七面 鳥子（大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科演技演出コース）、保井岳太（京都芸術大学舞台芸術学科演技演出コース）

演出助手：七面 鳥子 / アンダースタディ：倉茂駿、ジュリ太郎、ワタナベモモコ / 「対話の場」におけるファシリテーター：岡田露子、山崎達哉、高安美帆 / 「対話の場」における手話通訳（3月9日（土）13:30公演のみ）：高橋記子、三田宏美（共にTA-net） / 舞台監督：北方こだち / 照明：川島玲子 / 映像操作：福岡想 / 宣伝美術：中村詩おり / 記録写真撮影：脇田友（スピカ） / 記録映像撮影：泉宗良（うさぎの喘ぎ） / 制作：阪田愛子

主催：学校法人瓜生山学園 京都芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉 / 京都芸術センター制作支援事業

### 研究組織

岡田露子（研究代表者、演劇研究、京都芸術大学舞台芸術学科専任講師）

筒井潤（共同研究者、劇作・演出、dracom）

山崎達哉（共同研究者、大阪大学中之島芸術センター）

高安美帆（共同研究者、エイチエムビー・シアターカンパニー）

小田康徳（研究協力者、NPO 法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会理事長、大阪電気通信大学名誉教授）

阪田愛子（研究協力者、制作）



写真撮影：脇田友

劇場実験 6編のうちの1編「女学生」

## 次世代音響『イマーシブオーディオ』の可能性について

大久保 歩 | 京都芸術大学舞台芸術学科教授

劇場に於ける電気音響技術の手法は、舞台前の左右に客席に向けて設置される2台のスピーカーセットによるものが長年使用されてきている。しかしこの手法はスピーカーの前に座る観客にとっては、舞台中央で話す演者の声がスピーカーから聞こえてくると云う違和感があった。近年、映画など映像の世界では立体音響と言われる5.1DやDolby Atmos®などが開発され、360度の全方位音響を体験できるようになっている。しかし舞台の世界では、なかなかその立体音響の手法が開発されず、違和感を覚えながらも左右のスピーカーの音が舞台音響として定着していた。

しかし、デジタル音響技術やコンピューターの進歩により、観客席のどこにいてもスピーカーの存在を意識せず、演者が喋る、演奏者が演奏する、その位置から音が聞こえてくる(定位感という)ことが可能となってきた。あるいはヘリコプターが自分の頭上を飛んでいく、旋回する、なども可能となっている。空間から音が聞こえるという感覚なのである。この新しい技術こそイマーシブオーディオ(以下、IAと記載)と呼ばれるものである。

本研究では、このIAがどのような効果をもたらすのか、実際に舞台上で複数台のスピーカーを設置し、IAの可能性を探るものである。

### 事前調査

当初、2022年に本研究の計画書を提出した際には、おおよそ3種類のIAの機器を聞き比べ、その特徴からIAの可能性を探ろうと考えていた。

当時、IAの開発をしているのはスピーカーメーカー(Meyer社、d&b audiotechnik社、L-Acoustics社)や、スピーカーメーカーに依存しないソフトウェアを開発しているFlux::社のSPAT Revolution®などが調査研究対象として上げられた。

2022年11月17日に幕張メッセで開催されたInter BEE 2022という放送・舞台関係の展示会に参加し、前述の各社とのコンタクトを図った。

結果としては、スピーカーメーカーの開発するソフトは、そのメーカーのスピーカーを使用しないと利用できないという「縛り」が非常に強固にあった。

### 事前研究

2023年1月、IAの先駆者でもある橋本敏邦様(T-SPEC社)にご相談し、IAに必要なPCのスペックやソフトウェアの特徴などをお聞かせ頂き、研究の第一歩を開始することが出来た。

合同研究会として2023年8月に研究協力者の方々Zoomにてミーティングを行い、研究会の内容について以下の点について協議した。

1. クリストファー氏への講演依頼内容案
2. 録音音源を使用したイマーシブオーディオの検証
3. 生バンド演奏を使用したイマーシブオーディオの検証
4. 使用するソフトはFlux::社のSPAT Revolution®のみで行うことも決定された。

3については京都らしく、能・狂言の音源や邦楽の生演奏はどうかのご意見もあったが、時間的制約などで見送りとなった。

2023年4月と8月にはSPAT Revolution®の取扱い習熟の為、国内販売元である(株)メディア・インテグレーション社にて講習を受けた。その後もソフトの習熟の為、室内に小型スピーカーを吊り、実験を重ねていった。

12月には(株)メディア・インテグレーション社より、SPAT Revolution®の開発者でもあるヒューゴ・ラリン氏の来日の可能性を提示していただくと共に、春秋座に於けるスピーカー配置のアドバイスなどをいただいた。

2023年5月には、共同研究者の石丸耕一氏にお誘い頂き、チェルフィッチュの演劇作品『リビングルームのメタモルフォーシス』の世界初演をウィーンで拝見し、「暗闇の中に灯台を見つけた」ように思えた。その定位感や楽器と台詞のバランスがあまりにも自然で、電気音響を使用していない感覚であった。そしてこれこそ、次世代の電気舞台音響だと確信を持つことが出来た。

直前ミーティングとしては、2024年1月に基調講演をお願いしたクリストファー・プラマー氏とZoomにてミーティングを行い、氏の講演内容について内容を検討した。

### 研究会準備・調整

2月4日午前からは、春秋座に於いて仕込作業を開始した。舞台框(舞台の前面)にはMEYER社のUPM-1Pを7台設置、客席上空の電動パトロンにL-Acoustics社のX12を5台パトロン吊りした。これらは全て春秋座の保有する設備で行った。

この位置関係がIAでは非常に重要な為、前もって図面上でプランした通りに正確に寸法を計測し、その方向、下向き角度などを調整した。

その後、SPAT開発者のヒューゴ・ラリン氏にも加わっていただき、電気的な調整を行った。ラリン氏から教わるノウハウは、今回の研究会の中で一番私的に勉強になった時間であった。これらの調整は翌日の2月5日も継続して行われ、微調整が続いた。

実際の現場であるところだけの時間を調整に割くことは難しく、事前準備とプランをする上でのノウハウの蓄積が必要であると痛感した。



### 研究会初日

公開初日の2月6日にはクリストファー・プラマー氏に基調講演を行っていただいた。

氏はミシガン工科大学で教鞭を取りつつ、ミュージカルやオペラなどの音響プランをされている。その立場が私と同様で有り、共感を覚える。

氏には「アメリカ合衆国におけるイマーシブオーディオの現状について」と題しての講演をお願いしたが、その実用例ばかりでなく、IAの基本知識やその応用方法までをお話しいただいた。

その中でも特に興味を持ったのが、「耳の水平方向の定位精度は約7.5度、垂直方向の定位精度は約30度」と云うことであった。

つまり、水平方向の方が圧倒的にその方向を感じる精度が高いということであり、IAは2次元でも十分にその効果があると云うことだと解釈している。



次に東京芸術劇場のトーンマイスター、石丸耕一氏に音像定位の歴史から、2023年5月に世界初演を迎えたチェルフィッチュ『リビングルームのメタモルフォーシス』で使用されたIAについてお話しいただいた。IAやデジタル音響のなかった時代に先駆者達はどのように工夫を重ねて音像定位を再現しようとしたのか。IAの持つ意義をそこに見いだせるお話であった。

その後、ソフト開発者のラリン氏にSPATというソフトの原理やどのようなことが出来るのかというご講演をいただいた。

初心者にも解るような波面合成の技術理論は改めて自分の知識を見直すことが出来た。

氏の講演内容の概要は、ご協力いただいた(株)メディアインテグレーション様のHPに記載されている。

[https://www.minet.jp/contents/article/event-report\\_flux-spat-revolution\\_202403/](https://www.minet.jp/contents/article/event-report_flux-spat-revolution_202403/)

### 研究会2日目

2月7日の2日目にはバンド演奏によるIAの効果を検証した。バンドは古くからの友人であるTommy(Tb)氏率いるTrois Milesをお願いした。他のメンバーは松井優樹(Fl)さんとR1SA(Pf)さんである。これは各楽器の音域を考慮してこの楽器編成になっている。

前後左右に移動しながら楽器を演奏して貰い、IAを使用した定位を検証した。IAのオペレートはラリン氏がかって出てください、楽器の向きや位置情報を的確に操作されていて、これも今後のオペレートに非常に有効な経験となった。

その後、舞台芸術学科のミュージカルの授業発表公演で録音した音源や、効果音を再生しIAの持つ移動定位を検証した。



### 考察

当初は、3種類のIAの聞き比べを研究の軸としようと考えていたが、時間的な制約などにより現実化が難しくなったため、スピーカーメーカーを限定しないIAソフトFlux::社のSPAT Revolution®に絞って研究することとなったが、結果的にはこのソフトを使用してのIAの可能性を深掘りできたと思う。

結論を先に言えば、一度IAの音を聞いたら従来のステレオには戻れなくなるほど、説得力にあふれた表現が可能になると云うことである。他者にIAをどう伝えるのかは『一度聞いてみてください』としか表現できない。

ストレートプレイ、ミュージカル、オペラ、ダンスなど、パフォーマンス分野においては、必須のアイテムとなると確信する。

8月30日に兵庫芸術文化センターで開催された「第19回舞台技術セミナー『シアターイマーシブの標準化を目指して』」というセミナーに、本研究会メンバーの金子彰宏氏にお招きいただき、本研究会の成果を発表する機会を頂戴した。

240名ほどの音響技術者や制作者が集まり、IAを体験して頂いた。必須のアイテムと成ると確信はしていても、如何にしてIAを普及させるかという所に着目したセミナーであったが、劇場の改修時や新築時にIAのシステムを導入していただき、数多くの観客にそれを体験して貰うことにつぎるのではないかと思う。

今回、このような研究会を開催できたことは京都では初めてのことで有り、春秋座を京都のIAの拠点として発展させていきたいと考える。

最後に、本研究会の実施をお勧めいただいた、舞台芸術学科の先生方、舞台芸術研究センターの皆様、ご協力いただいた研究会メンバーと研究協力者の皆様、そしてご来場いただいた皆様に深く感謝を申し上げる。

#### 研究組織

研究代表者  
大久保 歩 | 京都芸術大学舞台芸術学科教授  
研究会メンバー  
石丸 耕一 | 公財) 東京都歴史文化財団(東京芸術劇場)  
押谷 征仁 | 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 舞台技術部  
金子 彰宏 | 兵庫県立芸術文化センター、日本音響家協会西日本支部支部長  
土肥 昌史 | ロームシアター京都、日本舞台音響家協会 研修育成委員長  
山口 哲 | (株)メディア・インテグレーション ソフト販売者

#### 研究協力者

Trois Miles Tommy(Tb)、松井優樹(Fl)、R1SA(Pf) (バンド演奏)  
株式会社メディア・インテグレーション  
京滋舞台芸術事業協同組合  
合田加代((株)結音)、椎名見嗣(フリー)  
辻井美穂(通訳)  
舞台芸術学科舞台デザインコース 音響志望学生 延 29名

# 蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究

関典子 | ダンサー／神戸大学准教授／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

「バレエ・リュス」(1909-1929)は、稀代の興業主セルゲイ・ディアギレフが率いた伝説的バレエ団である。「天才を見つける天才」とも称される彼は、その審美眼を発揮して選んだ一流の芸術家たちを協働させ、バレエを最先端の総合芸術へと一気に押し上げた。「薄井憲二バレエ・コレクション」は兵庫県立芸術文化センターが所蔵する世界でも有数の規模を誇るコレクションであり、筆者は2014年10月からキュレーターを務め、近年は「踊るキュレーター」として、歴史的資料と現代の創作の交点に立った活動を継続している。本プロジェクトでは、総勢15名の共同研究メンバーと共に、「バレエ・リュス」と「薄井憲二バレエ・コレクション」を複眼的に研究・創造し、薄井氏の生誕100周年にあたる2024年、春秋座にて「劇場実験」を実施した。以下、その概要を報告する。詳細については、参考資料(映像、対談、批評)を参照されたい。

## 劇場実験「蘇るバレエ・リュス」プログラム

- 第1部
- 映像 | 『Nymphe』
  - 歴史 | 「現代人にとってバレエ・リュスとは」
  - 人物 | 「薄井憲二バレエ・リュス」

- 第2部
- 舞踊 | 『パレード』
  - 衣裳 | 「バレエ・リュスの衣裳デザイン」
  - 音楽 | 『Chronicle 1910』

- 第3部
- 舞踊 | 『牧神とニンフの午後』
  - 交流 | 意見交換・懇談

- 展示
- サウンドインスタレーション『Chronicle 1910』
  - 兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」複製(現物資料は、兵庫県立芸術文化センターでの企画展・常設展にて展示)

## 歴史・人物(講演)

日本におけるバレエ・リュス研究の第一人者、鈴木晶による基調講演「現代人にとってバレエ・リュスとは」では、バレエ・リュスが同時代の我々に与えたインパクトや特異性について語られた。

斎藤慶子による講演「薄井憲二とバレエ・リュス」では、日本人である薄井憲二がいかにしてバレエ・リュスに魅了され啓蒙したかについて語られた。

## 音楽・映像(新作)

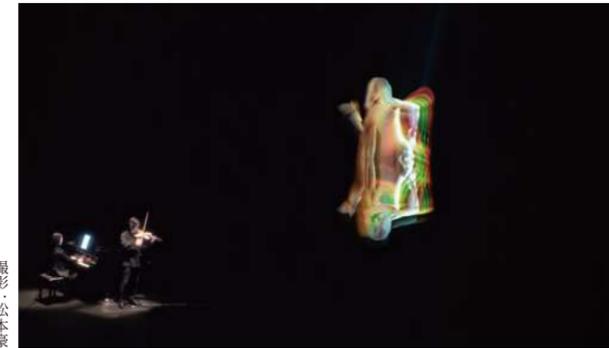
本プロジェクトから生まれた新作は二つある。山中透と竹内祥訓による『Chronicle 1910』は、ホワイエでのインスタレーションと舞台でのライブとして発表した。バレエ・リュス音楽と現代の音色を再構成・再作曲し、レオン・バクストの絵画をデジタル処理した映像と共に立体音響空間が創出された。

工藤聡、佐藤一紀、三浦栄里子による『Nymphe』は、関の映像作品『牧神とニンフの午後』をもとにした新たな映像作品を工藤が制作し、それに触発された佐藤が新曲を書き下ろすという創造の連鎖から誕生した。

## 衣裳(講演・再現制作・実演)

バレエ・リュスは衣裳デザインの面でも画期的であった。本橋弥生による概論の後、鷺尾華子により『青い鳥』衣裳の再現制作過程が語られ、後藤俊星による実演を行った。100年前の衣裳が

実際に舞台上舞う様は鮮烈であり、「この衣裳が踊る様を観たい」という筆者の長年の夢が叶えられた。舞台での実演後はホワイエおよび兵庫の企画展でも展示。衣裳の細部をご覧いただき、注目を集めた。



撮影・松本豪

『Nymphe』

## 舞踊(舞台機構・劇場空間)

関典子振付の2作品を春秋座版として改訂上演した。『パレード』(観客は舞台上および1階席で鑑賞)では、原作にある「見世物小屋の前の広場での呼び込み」という設定のもと、舞台機構(花道のスッポン、定式幕、廻り舞台)を駆使した賑やかなパフォーマンスを演出した。

『牧神とニンフの午後』(観客は2階席から鑑賞)では、初代市川猿翁がバレエ・リュスを目撃した影響下で創作したとされる『黒塚』における革新的な照明(月と戯れる影法師)を意識し、劇場空間と共に変容する様を演出した。

## スタッフ(舞台技術・制作)

劇場実験では、バレエ・リュス往時の「熱量ある劇場空間を蘇らせた」という趣旨のもと、春秋座という歌舞伎劇場全体を活かした参加型・周遊型の形式をとった。舞台監督・音響の金子彰宏による『パレード』の箱や鳴り物の制作、照明の三浦あさ子によるシーンごとの雰囲気彩る照明、制作の若林絵美、福島尚子による観客の誘導など、各位の尽力があってこそ実現できたことを痛感している。舞台芸術研究センター各位にも多大なる尽力を賜り、そしてこの劇場実験を目撃された多くの来場者の方々に、心より感謝を申し上げたい。



撮影・松本豪

『パレード』

## 研究会・劇場下見

研究会は、2023年6月から2024年3月にかけて、計8回実施した。合同研究会と個別研究会を各4回、個別研究会は兵庫県立芸術文化センターにて、薄井憲二バレエ・コレクションの資料を閲覧しながら実施した。

劇場下見を全5回、計8日間実施できたことも貴重であった(2023年9月5日、10月27日、12月26日、2024年1月9日、1月17～20日)。春秋座の舞台とホワイエをくまなく拝見し「この春秋座で何ができるか?」を試行錯誤できたことは非常に有効であり、その結果、参加型・周遊型の形式をとり、来場者に様々な移動していただきながら「新たな劇場体験の創出」を目指した。

## 第1回研究会(合同研究会1:非公開)

「はじめに：バレエ・リュスと薄井憲二バレエ・コレクションを知る」

日時：2023年6月23日(金)15:00～17:00  
会場：オンライン  
参加者：全員

## 第2回研究会(個別研究会1:非公開)

「総合芸術としてのバレエ・リュス：美術・ファッション」

日時：2023年7月14日(金)13:30～17:00  
会場：兵庫県立芸術文化センター  
参加者：関典子、三浦栄里子、本橋弥生

## 第3回研究会(個別研究会2:非公開)

「総合芸術としてのバレエ・リュス：音楽」

日時：2023年7月26日(水)13:30～16:30  
会場：兵庫県立芸術文化センター  
参加者：関典子、三浦栄里子、山中透、若林絵美

## 第4回研究会(合同研究会2:非公開)

「バレエ・リュス音楽の再作曲」および「劇場実験の実施内容・プログラムについて」

日時：2023年9月28日(木)10:00～12:00  
会場：ハイブリッド(兵庫県立芸術文化センターおよびオンライン)  
参加者：全員

## 第5回研究会(個別研究会3:非公開)

「バレエ・リュス衣裳の再現制作・実演」(仮縫いフィッティングおよび議論)

日時：2023年11月17日(金)10:30～12:00  
会場：ハイブリッド(兵庫県立芸術文化センターおよびオンライン)  
参加者：関典子、三浦栄里子、本橋弥生、後藤俊星、鷺尾華子

## 第6回研究会(個別研究会4:非公開)

「新作映像作品『Nymphe』について」(演奏と音楽のリハーサルおよび議論)

日時：2023年12月23日(土)14:00～19:45  
会場：兵庫県立芸術文化センター  
参加者：関典子、三浦栄里子、佐藤一紀、工藤聡、金子彰宏、三浦あさ子、茂木紀恵(照明アシスタント)

## 第7回研究会：劇場実験(合同研究会3:公開)

「劇場実験：蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究」

日時：2024年1月17(水)～19日(土)9:00～21:00(非公開：仕込み・リハーサル)、1月20日(土)15:30～19:30(公開)  
会場：京都芸術劇場 春秋座  
参加者：全員  
一般参加者：約300名

## 第8回研究会(合同研究会4:非公開)

「劇場実験：蘇るバレエ・リュス：薄井憲二バレエ・コレクションの同時代的／創造的探究の振り返り」

日時：2024年3月25日(月)20:00～21:12  
会場：オンライン  
参加者：全員



撮影・関典子

兵庫県立芸術文化センター「薄井憲二バレエ・コレクション」第32回企画展『レオン・バクストの衣裳：劇場実験「蘇るバレエ・リュス」特別展』

## 参考資料

- 映像 | <https://youtu.be/GBRD74hCIx4>  
(劇場実験「蘇るバレエ・リュス」ダイジェスト／撮影・編集：山口順二)  
対談 | <https://www.chacott-jp.com/news/worldreport/osaka/detail034590.html>  
(『Chacott Web Magazine : Dance Cube』2024年1月17日／関典子、関口絃一、香月圭)  
批評 | <https://www.chacott-jp.com/news/worldreport/osaka/detail034839.html>  
(『Chacott Web Magazine : Dance Cube』2024年2月9日／関口絃一)



映像



対談



批評

## 研究組織

### 研究代表者

関典子 | ダンサー／神戸大学准教授／薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター

### 研究分担者

鈴木晶 | バレエ史研究／法政大学名誉教授  
斎藤慶子 | バレエ史研究／大阪公立大学特任講師  
山中透 | 作曲家／DJ / ダムタイプ創立メンバー  
三浦栄里子 | ピアニスト／兵庫県立芸術文化センター

### 研究協力者

本橋弥生 | ファッション・美術研究／京都芸術大学教授  
竹内祥訓 | 映像作家／VJ  
佐藤一紀 | ヴァイオリニスト／ピアニスト  
後藤俊星 | 薄井コレクション・アシスタント／貞松・浜田バレエ団  
鷺尾華子 | 衣裳家／HANA DESIGN ROOM  
工藤聡 | 振付家／映像作家  
金子彰宏 | 音響家／舞台監督／兵庫県立芸術文化センター  
三浦あさ子 | 照明家  
若林絵美 | 制作／薄井コレクション・アシスタント／Petit GRACE  
福島尚子 | 制作／高知県立美術館

協力 | 兵庫県立芸術文化センター 薄井憲二バレエ・コレクション／株式会社ピーエーシーウエスト

スタッフ | 照明アシスタント：茂木紀恵 大内あかり / 音響オペレーター：寺坂素直 / 映像アシスタント：羅哲也 / 記録映像：山口順二 / 記録撮影：松本豪 / パンフレットデザイン：菊谷昌江

# 「hysteria」プロジェクトー〈女性〉の身体への眼差しを転じる リサーチ・ダンスの試みー

松本 奈々子 | チーム・チープロ共同主宰、ダンスアーティスト

「hysteria(ヒステリア)」プロジェクトは、「hysteria」という言葉をキーワードに社会的に構築される〈女性〉の身体をまなざす欲望を転じ、踊りを創作するリサーチ・ダンスプロジェクトである。

「hysteria」は古典ギリシア語で「子宮」を意味し、「ヒステリー」の語源である。かつて医師は〈女性〉の体調の変化を子宮が転がり回っているからであると診断し、治療を施したという。“ヒステリー”という言葉は現在は医療用語としては用いられていないが、本研究会ではその言葉にあえて立ち返ることでみる/みられる構造や欲望を見つめ直し、それらに回収されない〈女性〉の身体、そして踊りを創造するための手がかりを得ることを目指して、主に以下の調査・実験をおこなった。

## 1. 文献・スタジオ・フィールド調査

〈女性〉の身体へと向けられる科学的な眼差しと 魔術的・神秘的な眼差しの交差に着目して、研究者やダンサーとの共同研究会、フィールドリサーチ、文献購読をおこなった。

## 2. 映像再生装置を用いた上演形式の実験

19-20世紀頃の精神医学の分野において、男性医師たちはヒステリー症状の分析を写真記録をもとに行っていた。その記録には女性が進んで参加し、ヒステリー特有の身振りを自ら演じたとされる。この史実をふまえて、映像再生装置を用いたあらたな上演形式の開発・実験をおこなった。

### 第1回-第5回 みるみられる研究会(非公開)

日時: 2023年4月23日、5月2日、7月8日、9月17日、12月17日 各3時間  
会場: YAU STUDIO  
参加者: 宮下寛治、安倍大智、西本健吾、松本奈々子、小森あや

本研究会では、共同研究メンバーで、ドイツ語圏の現代舞踊研究を専門とする宮下寛司さんと、「hysteria」プロジェクトとかかわる現代舞踊研究や作品を共有し、議論した。「hysteria」というアイデア/概念をとおして、現代舞踊についてどのように考えることができるのか、また「hysteria」プロジェクトを劇場実践としてどう実装することができるのかについて、考えることを目的とした。

検討した作品:  
Antonia Baehr『Lachen』/she she pop『50 grades of shame』/Meg Stuart『Violet』/『ジゼル』

この研究会をふまえた執筆・発表:  
(論文)  
宮下寛司「クィアな欲望の舞台としての演劇的身体—— She She Pop『50 Grades of Shame』を例に」『藝文研究』第126号、慶應義塾大学藝文学会、2024年6月、58-74頁。

(研究発表)  
宮下寛司「ジゼル、ヒステリー、アラベスク」  
日本独文学会シンポジウム「ロマンティック・ラブの出発点/消失点としての結婚——1800年前後の文学・芸術を例に」(於: 慶應義塾大学日吉キャンパス)、2024年6月。

(関連する執筆物)  
宮下寛司「6stepsについての覚え書きと2023年12月に行われた2つの公演について」  
ST Spotウェブサイト  
(<https://stspot.jp/schedule/?p=10546>) 2024年2月公開



みるみられる研究会

### 第1回-第3回 グラハム研究会(非公開)

日時: 2023年5月15日、6月19日、11月18日 (各3時間)  
会場: YAU STUDIO (第1回)、STスポット (第2回)、森下スタジオ (第3回)  
参加者: 久保枝里紗、中屋敷 南、穴山香菜、松本奈々子、宮下寛治、安倍大智、西本健吾

本研究会では、「vaginaで踊れ」という指示を出したとされるマーサ・グラハムのダンスメソッドや振付作品をもちいたワークを行った。ダンサー・振付家の中屋敷 南さんとダンサーの穴山香菜さんをお呼びし、20世紀初頭にアメリカモダンダンスの黎明期を形作ったマーサ・グラハムの伝説をたどりながら、〈女性〉の身体をどのように想像し、そこからどのような踊りを立ち上げることができるのかについて考えていった。

第三回目の研究会では、共同研究者の安倍大智さんに制作を依頼した手回し映像再生機「ぶんぶん丸」を用いてマーサ・グラハムの映像を再生するワークを行った。グラハムや参加者が振付た踊りの映像を再生・逆再生・反復・スロー再生・クイック再生することで、動きから別のイメージや踊りが生まれる可能性を探った。また、「手回し再生機」をもちいて再生する身体を観察した。久保枝里紗さんに映像記録を依頼した。

収録映像:  
[https://www.youtube.com/watch?v=C\\_aInpuU\\_\\_c](https://www.youtube.com/watch?v=C_aInpuU__c)



グラハム研究会

### 撮影とパフォーマンスの関係を研究・開発する研究会1

#### 第1回 コレオグラフィックカードの作成(非公開)

日時: 2023年10月9日-20日  
会場: YAU STUDIO  
参加者: 松本奈々子、齋藤英理、内山真菜美、西本健吾

#### 第2回 上演の実践(公開)

日時: 2023年10月21日  
会場: YAU STUDIO  
参加者: 松本奈々子、西本健吾、木村玲奈

本研究会では、「コレオグラフィックカード」の制作と上演実践(『《ブギウギ・S》variations』)を通じて、撮影とパフォーマンスの関係を検討した。写真技術を用いたヒステリーの分析方法をふまえながら、踊る身体の写真とそれを名づけたカード(「コレオグラフィックカード」)を作成し、それを用いた上演(プレイング)をおこなうことで、踊る身体を切り取りあらたなイメージを生み出すことを試みた。



『《ブギウギ・S》variations』

### 撮影とパフォーマンスの関係を研究・開発する研究会2

#### 第1回 打ち合わせ(非公開)

日時: 2023年12月30日  
会場: チーム・チープロ 事務所  
参加者: 西本健吾、松本奈々子、齋藤英理

#### 第2回 撮影(非公開)

日時: 2024年1月30日  
会場: STスポット  
参加者: 齋藤英理、松本奈々子、西本健吾、池添俊

#### 第3回 実験(非公開)

日時: 2023年2月21日  
会場: チーム・チープロ 事務所  
参加者: 西本健吾、松本奈々子、齋藤英理

本研究会では、ディディ=ユベルマン『ヒステリーの発明』で紹介されている「ヒステリー患者」のイメージを基に作成した身体の動きをフィルム映像で撮影し、その映像を手回し映像再生機「ぶんぶん丸」とテキストを用いて観察することを試みた。踊る身体をどのように切り取り、イメージを生み出すことがで

きるのかを考察し、上演形式を発明・試演するための準備をおこなった。



手回し映像再生機「ぶんぶん丸」

### フィールド調査

#### 第一回 遠野

日時: 2023年7月21日-23日  
参加者: 西本健吾、松本奈々子

#### 第二回 有楽町

日時: 2023年4月-6月  
参加者: 西本健吾、松本奈々子

身体と映像/イメージとの関わり方を探るために土地と関わる民俗学的想像力を参考にしようと考えた。本研究会では、①養蚕にまつわる民話「オシラサマ」と関連する地域「遠野」と、②新聞メディアや映画消費・流通の中心地として栄えてきた「有楽町」でのフィールドリサーチをおこなった。

### 研究組織

#### 研究代表者

松本 奈々子 | チーム・チープロ共同主宰、ダンスアーティスト

#### 共同研究者

西本 健吾 | チーム・チープロ共同主宰、ドラマトゥルク

安倍 大智 | デザイナー、nora design collective

宮下 寛治 | 現代舞踊・パフォーマンス研究

#### 研究協力者

中屋敷 南 | ダンサー・振付家

穴山 香菜 | ダンサー

久保 枝里紗 | 映像

齋藤 英理 | アーティスト

池添 俊 | 映像作家・演出家

内山 真菜美 | デザイナー

木村 玲奈 | ダンサー・振付家

## アッピア演出『オルフェオとエウリディーチェ』（1913）をモデリングする

横田宇雄 | 舞台技術・セノグラフィ研究

本研究では、オペラの再現上演にかかる要件を技術的側面から考察し、ヘレラウ祝祭劇場の3Dモデリングを製作した。対象は、アドルフ・アッピア(1862-1928)の演出作品である。国内で研究会を実施した上で、調査員はヘレラウ祝祭劇場(ドイツ、ドレスデン州)で現地調査を行った。

ヘレラウ祝祭劇場は、1912年に開館した近代型の音楽堂である。アッピアは1913年に『オルフェオとエウリディーチェ』(クリストフ・ヴィリバルト・グルック作曲)を上演している。この時に製作した舞台装置は、後の現代オペラに多大な影響を与えた。

同劇場は『Rekonstruktion der Zukunft : Raum - Licht - Bewegung - Utopie』(2017)という企画で、開館時の舞台装置と照明装置を再現している。多くの再現上演に限られた要素のみを対象とするのに比べ、初演時の様相を残す空間での歴史考証に基づく再現は稀なケースである。上演する上で足りない情報は、現地の実測によって補うことができるため技術者の役割は大きい。従って、「歴史的気付き」(ハンター、2014年)を提供するのは、歴史家による考証や芸術家の独創性だけではなく、舞台技術者の判断も含まれるということが確認できた。

### 課題の背景と研究方法

本調査はアッピアの数少ない実作の中で、比較的豊富に資料が残されているオペラ『オルフェオとエウリディーチェ』を対象とし、その再現にかかる技術的要件を明らかにするものである。再現上演と一言で言っても、目的や残された資料の質と量によって、その要件は異なる。全ての要素(演技、衣装、装置、観劇態度等)を再現することは不可能であるがゆえに、観客に対して、どの要素を正当化しているかという解説・但し書きが重要になってくる。

本研究は、(アーカイブや最新の研究成果による)既知の事実と、実演家による解釈の差異を抽出する手法を取ることで、再現上演に必要な技術的・経済的条件を明らかにすることを目的としている。主に対象とするのは文献資料、図版資料、批評や演出ノート、上演空間である。ヘレラウ祝祭劇場は、2012年に大規模な修復工事が竣工しており、構造および外観は、ほぼ初演当時のままに復興された。加えて、劇場が位置するヘレラウという町は、田園都市運動によって作られたニュータウンであり、現在もまだ復興運動が行われており、建築だけではなく周辺環境も含めて二重三重にも歴史的気付きを構成する要素が揃っている。

### 調査と成果

①邦訳：上半期は、アッピア著作及び先行研究の文献調査にあたった。再現上演にとって重要だと思われる著作は、一部邦訳して研究会で発表を行った(エッセイ7点)。

②現地調査：下半期は、現地調査のための準備、日本で再現上演をする場合の技術要件の下調べと費用の見積りを行った。ヘレラウ祝祭劇場からは、リニューアルオープン時から業務にあたっているフランク・ゲイスラーさんに受入担当者として、事前の情報提供や各所への連絡の取次ぎを行っていただいた。

③見積り：日本での再現上演については、主に照明システムと可変台の製作に関して照明家・大道具家に見積りを依頼した。概算ではあるが、800万円程度の費用が見込まれているため、

実現には研究や創造活動のための助成金を駆使する必要があるだろう。

④3Dモデリング：研究代表者と研究協力者は、これら調査を踏まえて3Dモデリングを製作した。

### 現地調査

12月5日(土)に、現地調査を行った。ゲイスラーさんの案内で、施設全体を案内してもらった後、プラスバーグさんに『Rekonstruktion』で製作した舞台装置を見せていただき、製作当時の話を伺うことができた。

翌6日は、劇場周辺を散策した。田園都市ヘレラウの現在を観察することができた。

### 研究の今後

帰国後は、照明家・久松夕香と共に、ヘレラウ祝祭劇場の3Dモデリングを製作した。デジタル技術を採用したプロジェクトも並行して進めており、この3Dモデリング上で、ダンサー・森裕子が踊るといった試みを始めている(進行中)。

今後は、再現上演の実現に向けて、3Dモデリング上での再現シミュレーションを構築していく予定である。また、アッピア著作の邦訳も継続的に続けていきたい。こうした実績を踏まえて、再現上演のための資金獲得を目指したいと考えている。

#### 参考文献

Appia, Adolphe. 1988. *Œuvres Complètes*. ed. Bablet Hahn. Société Suisse du théâtre. *l'Age d'Homme*.

Beacham, Richard C. 2014. *Adolphe Appia: Artist and Visionary of the Modern Theatre*. Routledge.

Hunter, Mary. 2014. "What is historically informed performance?". pp. 606-626. in ed Helen M. Greenwald. 2014. *The Oxford Handbook of Opera*. Oxford University Press.

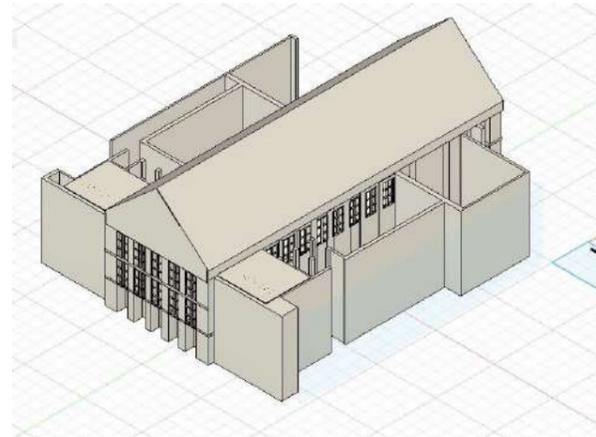
遠山静雄『アドルフ・アピア』1977年、相模書房。

長谷川章『田園都市と千年王国』2021年、工作舎。

山名淳『幻のドイツ田園都市 - 教育共同体ヘレラウの挑戦』2006年、ミネルヴァ書房。



ヘレラウ祝祭劇場(筆者撮影)



ヘレラウ祝祭劇場の3Dモデリング(筆者作成)

### 研究会別の活動報告

#### 第1回

公開、オンライン開催  
日時：2023年7月15日  
参加者：横田宇雄ほか一般聴衆

オペラの再現上演に必要な要件を整理した。アッピアによる舞台装置の改革、サルズマンによる新しい照明システム(全面間接照明)の検討、テッセナウ設計のシンプルな建築意匠、リトミック体操における衣装、田園都市と芸術運動、新自由教育の現在。(日仏演劇学会との合同開催)

#### 第2回

非公開、オンライン開催  
日時：2023年8月9日  
参加者：横田宇雄、伊藤彩、山本紗織、鈴木あゆこ、岸本昌也、宇津木千穂

リトミック教育とリトミックを活用した上演(バイビーシアター)の考察。発達段階における非言語コミュニケーションとアッピアの演劇理論の親和性の(再)検討。ダルクローズのリトミックが児童の身体教育に活用されていることはよく知られて

いるところ、これを児童向けの上演の際にどのように活用することができるかを実演家を交えて議論した。特に触覚や嗅覚など、非視聴覚的な感覚に訴えかけることの重要性が指摘された。また、喃語によるオペラの上演の可能性も検討された。

#### 第3回

ヘレラウ祝祭劇場への現地調査  
日時：2023年12月5日  
調査担当者：横田宇雄、久松夕香  
受入側担当者：フランク・ゲイスラー、トビアス・プラスバーグ、バート・ソネンベルグ

ヘレラウ祝祭劇場に現地調査を行った。2012年までのリノベーションの経緯、コンテンポラリーダンスの拠点としてどのような運営体制が取られているか、近代の文化遺産としてどのような建築の保存・広報活動を行っているか、復元されたアッピアの舞台装置の一部とその模型を調査した。詳細は成果報告に譲ることとする。

### 成果報告

調査報告書「アドルフ・アッピア演出作品の再現上演のために(1)~『Rekonstruktion der Zukunft : Raum - Licht - Bewegung - Utopie』(2017)調査を経て」(2024)、『京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2023年度』、73-94頁、京都芸術大学 舞台芸術研究センター。

#### 研究組織

研究代表者  
横田 宇雄 | 舞台技術、セノグラフィ研究

#### 研究協力者

久松 夕香 | ネザーランドダンスシアター 照明家  
森 裕子 | モノクロームサーカス ダンサー  
フランク・ゲイスラー | ヘレラウ祝祭劇場 学芸  
トビアス・プラスバーグ | ヘレラウ祝祭劇場 技術監督  
バート・ソネンベルグ | ヘレラウ祝祭劇場 制作

# 環境配慮型の舞台芸術創作のための国内の舞台芸術と環境についての基礎調査及び英国他ヨーロッパのサステイナブルプロダクションの実例調査

大島広子 | 舞台美術家・一般社団法人Image Nation Green (イマジネーション・グリーン) 代表理事

舞台芸術の担い手や観客も、社会の中のさまざまな産業と同様に、持続可能な社会の実現に向けて行動することが求められている。しかし日本の現状としては、舞台芸術に関する活動が起因する環境インパクトに関するリサーチや、環境配慮型のプロダクションの実践例は限られており、そうした運動が進んでいる欧米に比べると遅れをとっている。日本でも、環境視点や持続可能性を取り入れた舞台芸術創作の新しい仕組みの構築を急ぐ必要がある。本調査を通じて日本の現状を把握し、ヨーロッパの先行事例を調査・発表することで、日本国内での議論を活発化させ、日本の舞台芸術をはじめとする芸術文化に時代に即した変化を促すことを目指している。

具体的には、国内の調査として作品製作を行う公共劇場の技術者に対して、劇場内での環境の持続可能な取り組みについてアンケート調査を行った。海外の事例調査としては、イングランド、スコットランド、ベルギーにおける取り組みのフィールドリサーチや、4年に一度開催される舞台美術の世界的な展覧会ブラハ・カドリエンナーレ (PQ) で実施されたエコ・セノグラフィーワークショップに参加し、舞台芸術の中でも材料を多く消費する舞台美術でのエコロジカルなデザインアプローチについて学んだ。

## 英国での動き

芸術文化界の中の環境アクションの始まりは約15年前から始まっている。2007年に音楽業界での環境活動から開始したNGO 団体ジュリーズ・バイシクルは、このムーブメントの中心的な役割を担っていて、芸術文化界で働く人やアーティスト向け環境のセミナーの開催やノウハウの共有、Co2計算機を提供し、アーツカウンシル・イングランドと協力して環境にまつわる政策提言も行っている。アーツカウンシル・イングランドは2012年に環境ポリシーを発表し、長期助成団体に対してエネルギー使用量やゴミの排出量計測を定めることから始め、2023年から長期助成団体に対して、環境のアクションプランを提出することを助成条件に含むなど、より積極的な対策を打ち出している。

スコットランドでもジュリーズ・バイシクルと同じように芸術文化産業内の環境配慮を啓蒙、促進する団体クリエイティブ・カーボン・スコットランドが2011年に創設され、スコットランドの助成支援団体であるクリエイティブ・スコットランドと協働し、スコットランドの芸術文化団体の環境アクションを後押ししている。

2021年に英国の舞台業界の有志によって、環境配慮の基準や目標、ガイドンスが書かれたシアター・グリーン・ブックが発行された。これは持続可能な作品製作、劇場建築、劇場運営の3つのセクションから構成されており、ナショナル・シアター、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー、イングリッシュ・ナショナル・オペラなど国を代表する劇場から、地域ベースの小規模カンパニーまで、環境意識の高い団体によって活用されている。発行から3年たった現在、10カ国語に翻訳され多くの国でグリーンブックに準じた活動が始まっている。課題としては、イギリス国内におけるグリーンブック基準を満たす作品のほとんどは公的資金援助を受けている団体によるもので、商業ベースの作品には活用されていない、という現状が示す業界内での課題に対する温度差や、環境課題に対応できる人材が文化芸術界に不足していることなどが挙げられる。

欧米では、エコロジーと舞台芸術について学術的な議論も盛んになっており、そうしたテーマを取り扱う学術研究書、シンポジウムや大学の講義が年々増加している。それに伴い新しい概念(エコ・セノグラフィー)や役割(クライメート・ドラマターグ)も生まれ、それらが多くの表現者や作品に影響を与えている。

## 事例調査1(プロダクション)

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー (RSC) / イングランド  
劇団初となるグリーンプロダクション「テンペスト」

シアター・グリーン・ブック設定目標の「基本」をクリアしたこの公演では、スタッフや俳優がそれぞれの立場で環境負荷を少なくする工夫を行っていた。大道具では別の作品で使われた床やパネルが、再塗装され、置き方を変えて再利用したり、地元の林業を営む会社から間伐材を譲り受けて大道具として利用していた。衣裳では、イオン発生装置を使い洗濯の回数を減らす、オンラインの買い物を減らすなどの工夫を行っていた。また作品の設定(無人島に漂着した者たちの物語)に合わせて、舞台監督チームが海岸に打ち上げられた海の漂着物を回収し、小道具に作り替えるという、創造性と環境配慮の両面からの試みも興味深い。

## 事例調査2(関連企業)

リセット・シーナリー / スコットランド

舞台、映像、映画業界の廃棄予定の大道具や小道具を回収し、再販、リースを行う団体で、2017年に設立。グラスゴー郊外の倉庫に再使用可能なパネル、階段、床材、柱などをストックし、必要な現場に提供している。回収時とリース・販売時に見積書の項目にCo2排出量を記載し、リセット・シーナリーのサービスを利用することにより、どのくらいCo2の排出削減になったかを数値化して利用者に知らせている。倉庫の一角に若手デザイナーのアトリエを併設し、再使用アイテムをデザインプロセスに組み込む手法を育成するサポートも行っている。



リセット・シーナリーの倉庫内部

## 事例調査3

ブラハ・カドリエンナーレ (PQ) エコ・セノグラフィー・ワークショップ

エコ・セノグラフィーの提唱者であるタニア・ベア氏が主導したワークショップには、舞台美術を学ぶ学生やプロのデザイナー約25名が参加した。エコ・セノグラフィーとは、舞台美術の素材循環や地域・自然とのつながりを重視し、素材の特性からデザインを発展させていくという考え方である。ワークショップでは、劇場内にあったさまざまな素材を集めて、模型や小道具、衣裳を製作し、それらを用いたパフォーマンスが上演された。素材から着想を得てデザインを展開する手法は、環境問題への対応としてだけでなく、デザイナーの創造性を広げる可能性があるという今回の創作の過程を通じて実感した。これは「環境配慮が表現の制約になる」という従来の考え方と対照的で、限られた資源の中でクリエイティビティを向上させるための重要なヒントとなると感じた。



エコ・セノグラフィー・ワークショップでの成果物

## 国内のアンケート調査 サマリー

公共劇場舞台技術者連絡会に参加の劇場技術担当者にアンケートを実施。27館中23館より回答。

- ・所属の劇場では地球温暖化対策や環境配慮の取り組みが行われている 82%
- ・作品製作の際に環境に配慮した作品作りが行われている 51%
- ・劇場運営の会議において、環境への取り組みが議題に上がることがある 35%
- ・劇場での環境配慮の取り組みを掲示物などで利用者に告知している 20%
- ・劇場でも環境の持続可能性に取り組むべきである 87%

アンケート結果から、エネルギー使用量の節約やゴミの分別、削

減、大道具の再使用など、具体的な実践はすでに多くの劇場で行われていることがわかった。一方で運営会議の議題として扱われていると解答したのは全体の1/3にとどまり、多くの劇場が環境問題に対する指針がないまま、個別の実践が先行しているという現状がうかがえる。約9割の回答者が職場での環境の持続可能性への取り組みに賛同していることから、環境に対する課題感はある程度共有されており、この先の体系的な実践への移行に期待したい。

## 調査を振り返って

英国では2021年発行のシアター・グリーン・ブックが業界内で非常に注目されているが、すでに10年ほど前からCo2削減に向けて業界内での議論や実践が積み重ねられているということがわかった。国内の状況としては、多くの劇場が環境問題への対策を実施している一方で、劇場や組織の政策の中に環境問題を課題として捉えることが一般化していない現状がある。日本で今後取り組むべきことは、環境問題に対するこれまでの実践を再評価し、団体、個人が舞台芸術の活動に起因する環境の影響を知る機会を増やすとともに、取り組みやすい仕組み作りや助成金制度の見直しが必要だと考える。

<参考サイト>  
シアター・グリーン・ブック  
<https://theatregreenbook.com>

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー グリーンプロダクション「テンペスト」  
<https://www.rsc.org.uk/blogs/whispers-from-the-wings/green-scenery-for-the-tempest>

リセット・シーナリー  
<https://www.re-sets scenery.scot>

Beer, T., Rixon, T., Garrett, I., & Goh, A. (2024). Embedding ecoscenography into performance design pedagogy: three practice-based approaches. *Theatre, Dance and Performance Training*, 15(3), 472-494.

<https://doi.org/10.1080/19443927.2024.2345609>  
エコセノグラフィーをパフォーマンス・デザインの教育学に組み込む: 3つの実践に基づくアプローチ (PQにおけるエコ・セノグラフィー・ワークショップの手法と効果をまとめた論文)

研究ノート エコセノグラフィーの可能性—持続可能な舞台芸術創作におけるセノグラフィアー(舞台美術家)の貢献  
<https://k-pac.org/hp/wp-content/uploads/28a53d2bd8a0d041e1daa9507bdc6a71.pdf>  
京都芸術大学 舞台芸術研究センター 2023年度紀要

研究組織  
研究代表者  
大島 広子 | 舞台美術家・一般社団法人Image Nation Green (イマジネーション・グリーン) 代表理事

研究協力者  
パディ・ディロン | シアター・グリーン・ブック ディレクター  
公共劇場舞台技術者連絡会

## 京都芸術大学舞台芸術研究センター紀要 2023年度(2024年3月28日発行)

【研究論文】宮信明「土子笑面『話術新論』と三遊亭円朝」

【研究ノート】越智雄磨「パリ・オペラ座と「多様性」:『優雅なインドの国々』の新演出における「krump」の導入を巡って」

【研究ノート】奥田知恵「謡曲の現代語翻訳とその上演意義について—岡田利規訳「卒都婆小町」を例に—」

【調査報告書】横田宇雄「アドルフ・アッピア演出作品の再現上演のために(1)～『Rekonstruktion der Zukunft: Raum - Licht - Bewegung - Utopie』(2017) 調査を経て」

【研究ノート】大島広子「エコセノグラフィの可能性—持続可能な舞台芸術創作におけるセノグラフィ(舞台美術家)の貢献」

【レクチャー採録】田口章子(企画)・岡崎哲也(ゲスト)「猿翁アーカイブにみる三代目市川猿之助の世界 第八回フォーラム 三代目猿之助の〈離見の見〉」

【レクチャー採録】関口時正「タデウシュ・カントルの降霊会『死の教室』もとい『今は亡きクラスメイトたち』—上映後レクチャー—」

【京都芸術大学 舞台芸術研究センター活動記録】

### タデウシュ・カントル『死の教室』上映 & ミニレクチャー (2023年12月22日開催)



本研究拠点の主催事業として、20世紀を代表するポーランドの芸術家、タデウシュ・カントルの演劇作品『死の教室』の上映会を開催しました。映画史に残る巨匠アンジェイ・ヴァイダが撮影した貴重な記録映像を上映し、あわせてポーランド文化研究の第一人者、関口時正氏によるミニレクチャーを実施しました(会場:京都芸術大学映像ホール)。

### カバー写真: 京都芸術劇場 春秋座・舞台奥壁 撮影: 田村尚子

京都芸術劇場(大劇場:春秋座)の裸舞台の写真。映っているのは奥の壁面。剥き出しの舞台機構、機材や備品の露わな佇まいは、普段の公演ではあまり見せることがありません。本拠点の数々の劇場実験では、あえてそれらを活かして舞台空間のオルタナティブなありかたを探求してきました(編集部)。

### 編集後記

2023年度の共同利用・共同研究拠点連携プロジェクト(本誌p.1参照)のシンポジウムにもご登壇いただいた演劇批評家・研究者の鴻英良先生が、2024年12月6日にご逝去されました。鴻先生は、かつて本学舞台芸術研究センターの副所長を務められ、また機関誌『舞台芸術』の責任編集者としてご尽力くださいました。敬愛する先生の多大なご功績を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます(新里直之)。

### オープンラボラトリー OPEN LABORATORY

アニュアルレポート

vol.11 —2023年度—

2025年2月1日発行

企画: 京都芸術大学舞台芸術研究センター

舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点事務局

編集: 新里直之(京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員)

デザイン: ヴェッター公園デザイン室

学校法人瓜生山学園京都芸術大学

舞台芸術研究センター 舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点  
〒606-8271

京都市左京区北白川瓜生山 2-116

TEL: 075-791-9144

Web: <https://k-pac.org/> (JP) <https://k-pac.org/english/> (EN)

\* 本研究拠点は京都芸術大学舞台芸術研究センターが母体となり、  
文部科学省「共同利用・共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。

京都芸術大学

共同  
利用

共同  
研究

since 2013